

# 内裏名所百首雑歌考

岩崎禮太郎

## はじめに

建保三年（一一二五）に成立した「内裏名所百首」<sup>(1)</sup>（順徳院の催し）においては、一〇〇の歌枕が設定され、それが春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、恋二十首、雑二十首に分けられている。本稿はその「雑」の歌について若干の考察を試みるものである。

## 一

正治（一一九一）以後の百首における「雑」の部の設定についてたどってみよう。「正治初度百首」<sup>(2)</sup>（一一〇〇）においては、旅5首、山家5首、鳥5首、祝5首の部はあるが、「雑」という語の標示はない。「千五百番歌合百首」<sup>(3)</sup>（一一〇一詠進）においては「雑」10首の設定があり、「内大臣家百首」<sup>(4)</sup>（建保三年）においては「雑」25首の設定がある。そうして、「千五百番歌合百首」においては、祝5首が「雑」10首のほかに設定されていること、および「内大臣家百首」においては、「雑」25首の内わけが旅5首、述懐5首、祝5首、神祇5首、釈教5首になっていることに目を向けた

内裏名所百首雑歌考

上で、「内裏名所百首」の雑20首を考えなければならぬ。

ところで、「内裏名所百首」の雑の歌に、皇威の千年万年の隆盛を祈り寿ぐという祝言性の歌が詠まれていることは、この百首に別に祝の部のないことにもよるのであるが、更に、順徳院の催しにおいて奉る「内裏名所百首」であることによるものと考えられる。

過去の百首において、祝の部があるにもかかわらず、皇威の隆盛を祈り寿ぐ祝言性が祝の部の歌だけでは盛り切れず、四季の部の歌にも溢れていた例として、「正治初度百首」と「千五百番歌合百首」における俊成の歌があり、そこには「君」「君が代」「千代」「万代」といった語がちりばめられていることを、久保田淳氏が指摘しておられる。

この「内裏名所百首」において、雑の部以外にこのような祝言性のある歌を探ると、俊成女と家隆とに一首ずつ次のような歌がある。

水無瀬河（巻）

君もまた千年や影をみなせ河くらぬ御代の空の光に（俊成女）

御裳濯河 (夏)

夏引の糸もてをれるながき日の御もすそ河は千世もすむべし

(家隆)

次に、この「内裏名所百首」の「雑」の部における、このような祝言性のある歌を見よう。ところで、「皇威の千年万年の隆盛を祈り寿ぐ」という祝言性の歌に連なるものとして、「皇室中心思想のあらわれた歌」(皇室賛美の歌のほかに、上皇を敬慕する歌、天皇に嘆願する歌を含める)がある。それらを合わせて、皇室賛美・皇室尊重の歌として見てゆこう。このような歌を、「雑」の部において、歌枕別・歌人別に表にすると、「第一表」のようになる。

歌人別に多い者をとりあげると、俊成女7首、定家5首、家隆5首、兵衛内侍5首である。以下、これらの歌人ごとに見てゆこう。

俊成女の8首のうち、次の3首は皇室の千年万年の繁栄を祈り寿ぐ歌である。(以下、私に番号を付した。)

(1) 吉野河ふかきながれのためしにも波数まざる君が御代かな

(2) 鈴鹿河やそ瀬に祈る君が為吹く山風も万代の声

(3) 数ごとに千世をや君にむすぶらん松のはしげき海橋立

(1)は「吉野河」という歌枕の歌である。「吉野河」については、清輔の「和歌初学抄」に「ハヤシト」と記されている。それは、

吉野川岩波たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし(古今・

恋一・四七一・貫之)

に基いているのであろう。この百首の「吉野河」十二首の歌の中で、「はやし」(その活用形を含む)を用いている歌は六首あるが、

〔第一表〕

(計)	順徳院											
	行意	定家	家衡	俊成女	兵衛内侍	家隆	忠定	知家	範宗	行能	康光	
2											○	
2		○								○		
5		○								○	○	
0												
8	○	○	○							○	○	○
5									○	○	○	
5			○						○	○		
2		○								○		
0												
2		○									○	
1												○
0												○

「ふかし」<sup>51</sup>を用いているのは、この一首のみである。波の数を賀の歌に用いた前例は、

おちたぎつやそ宇治川のはやき瀬に岩こす波は千代の数か

(千載・賀・六一四・源俊賴)

がある。(2)は「鈴鹿河」の歌である。「やそ瀬」の語を用いているのは、

鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか夜越えに越えむ妻もあらなくに

(万葉十二・三一五六)

をふまえている。「万代の声」の用例は、

建曆二年大嘗会悠紀方の屏風の歌、長等山

菅の根のながらの山の嶺の松吹きくる風もよろづ代の声(続古

今・賀・一九二前中納言資実)

にある。詞書の建曆二年(一一二二)は、「内裏名所百首」の成立の三年前にあたっていて、この大嘗会は順徳天皇の即位によるものである。次に(3)は「海橋立」の歌である。過去における賀の歌では、

万代をまつにぞ君を祝ひつる千年のかけに住まむと思へば(古

今・賀・三五六・素性法師)

君が世を何にたとへむときはなる松の緑も千代をこそふれ(後

拾遺・賀・四三二・よみ人しらす)

のように、松の緑の不変性永遠性を詠んだ歌が多かった。この「内裏名所百首」の「海橋立」の歌においても、家隆は、

みつしほに朽らせぬ松や橋ばしらあまの橋だて千世も限らじ

と詠んでいる。ところで、松の繁つていることに着目した賀の歌

### 内裏名所百首雑歌考

は、

千早ふる平野の松の枝繁み千代も八千代も色はかはらじ(拾遺

・賀・二六四・大中臣能宣)

とあり、松の葉数に着目した賀の歌は、

君が代にくらべていはば松山の松の葉数はすくなかりけり(千

載・賀・六三二・藤原孝善)

とある。この「内裏名所百首」において、俊成女は、松の葉について「しげき」という語と「数」という語の両方を用いて(8)の歌を詠んでいる。

次に、俊成女の8首のうち、次の4首は皇室中心思想というべきものを詠み込んでいる。

(4)あらためて君が御代にやいにしへに帰る山ちも跡を知るらん

(5)末遠く君をぞたのむ飛鳥河あすは淵瀬をしらぬみくづも

(6)いたづらに杉の梢の下葉まで道ある御世に相坂の関

(7)日の本の光は君がみかけをやまち恋ひぬらん三津の浜まつ

(4)の歌は「還山」の歌である。「還山」という歌枕に関係つけて、

古に復ることを詠んでいる。後鳥羽院の強く目ざしておられた、天皇親政の世の復活という復古思想をこめて詠んだものであり、後鳥羽院を特に強く敬慕した俊成女の歌として注目されるところである。次に、(5)は「飛鳥河」の歌である。この歌は、

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬になる

(古今・雑下・九三三・よみ人しらす)

を本歌としていて、自分を「あすは淵瀬を知らぬみくづ」にたとえ、天皇に永遠におすがりする心を巧みに詠んでいる。(6)の歌は

「相坂関」の歌である。「相坂関」という歌枕から「杉」は連想されやすかった。後拾遺集には、

あふさかの杉のむらだち引くほどはをぶちに見ゆるもち月のこ

ま(秋上・二七八・良遣)

と詠まれ、新古今集には、

うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白きあふさかの山

(春上・一八・後鳥羽院)

とある。後鳥羽院に仕えた俊成女は、「逢坂関」と言えば直ちに右の後鳥羽院の歌が思い浮ぶという状態であったと考えられる。次に、「道ある世」の発想は、同じく後鳥羽院の、

おく山のおどろがしたをふみわけて道ある世ぞと人にしらせん

(新古今・雑中・一六三三)

をふまえている。また、「道ある世にあふ」という発想は、新古今集に、

平治元年大嘗会主基方、辰日参入音声、生野をよめる

大江山越えていく野の末とはみ道ある世にもあひにけるかな

(賀・七五二・範兼)

と詠まれている。(7)の歌は「三津浜」の歌である。この歌は、

いざこどもはやく日本へ大伴のみつの浜松待ち恋ひぬらむ(万

葉・巻一・六三・山上憶良)

いざこどもはや日の本へ大伴のみつの浜松まち恋ひぬらむ(新

古今・巖旅・八九八・山上憶良)

を本歌とし、天皇中心思想の歌へと転じている。

次に、俊成女の8首のうち、次の1首(若浦)は、後鳥羽院への

敬慕の歌と見たいのである。

(8)人なみに君わすれずはわかのうらの入江のもくづ数ならずとも  
(6)の歌において、自分を「みくづ」にたとえていたが、(8)の歌では自分を「もくづ」にたとえ、後鳥羽院(君)を敬慕していると見たいのである。

以上、皇室賛美・皇室尊重の歌について、俊成女の歌を見てきた。この「内裏名所百首」において俊成女の歌にこの種類のものが最も多いのは、彼女がかつて後鳥羽院からの恩顧を受けることが多かったからであろう。俊成女が建仁二年(一一二〇)に後鳥羽院女房として出仕したのは、院の御配慮によるものであった。院は彼女の不遇であったことに同情され、またその歌才を賞して、彼女を召されたのである。その出仕前に「千五百番歌合」の作者に任せられている。また新古今撰集に際して、元久二年(一一二〇)三月二日に、

以定家・家隆・押小路女房等三人、各可立一卷之始者(明月記)  
という院宣を下されている。その結果、彼女の歌は新古今集巻十二恋歌二の巻頭を飾るに至ったのである。これほどの栄誉を与えてくださった後鳥羽院の御恩顧の深さを、彼女は心に銘じて一生忘れることができなかつたのであろう。この「内裏名所百首」は順徳天皇内裏での催しであったが、順徳天皇は後鳥羽院の皇子であり、後鳥羽院はこの時期にも大きな影響力をもっておられ、天皇親政の治世の復活を目ざしておられたのである。それ故に、この「内裏名所百首」において、俊成女が皇室賛美・皇室尊重の歌を、雑の部で8首、春の部(水無瀬河)に1首と、他の歌人よりも最も多く詠んだ

心情は、十分に納得できるのである。

定家の5首のうち、次の4首は皇室の千年万年の繁栄を祈り寿ぐ歌である。

(9) 吉野河いはとかしはをこす波のときはかきはぞ我が君の御代

(新後拾遺集・慶賀・一五三四に入集)

(10) ずか河やせせふみわたるみてぐらも君が世ながき千世の長月  
(11) ざれ石はいはほと成りてあすか河ふちせの声をきかぬ御代かな

(12) 末遠き鳥羽田の南しめしよりいく世の花に御幸ふるらん

(9)は「吉野河」の歌であり、次の歌を本歌としている。

吉野川いはとかしはと常磐なす吾は通はむ万代までに(万葉・

卷七・一三三四)

「ときはかきは」の用例は、新古今集に、

寛治八年関白前太政大臣高陽院の歌合に、祝の心を

康資王母

万代を松の尾山の蔭茂み君をぞ祈るときはかきはに(賀・七二

六)

とあり、更にさかのぼると祝詞(春日祭・祈年祭)にある。「ときは」は「常磐」の約、「かきは」は「聖磐」の約「かちは」の誤った語という(岩波古語辞典)。ともに、磐石のように永久に変わらないことをいう語である。定家はこのような荘重な古語を用いて、皇室の永遠の繁栄を寿いでいる。次に(10)の歌は、万葉集の、

鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか夜越えに越えむ妻もあらなくに

内裏名所百首雑歌考

(卷十二・三一五六)

から言葉を取って荘重に詠んでいる。次に(11)の歌は、次の二つの歌、

わが君は千代に八千代にざれ石のいはほとなりて昔のむすま  
で(古今・賀・三四三・よみ人しらず)

世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬になる(古  
今・雑下・九三三・よみ人しらず)

を本歌とし、皇室の永遠の繁栄と、よく治まった御代への賛美とを巧みに詠んでいる。次に(12)の歌は「鳥羽」の歌である。「鳥羽」という歌枕は「鳥羽田」を連想しやすく、詞花集には、

山しろのとばたのおもをみわたせばほのかにけさぞ秋風はふく  
(秋・八〇・好忠)

の歌があり、新古今集には、

大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の面に落つる雁がね(秋下

・五〇三・慈田)

の歌がある。この「内裏名所百首」の「鳥羽」の歌では、十二首のうち「鳥羽田」として用いた歌が十首で、他の二首は「とはに」「(永遠に)の意」の掛詞として用いている。また、「鳥羽」は鳥羽上皇の離宮のあった所として知られている。この(12)の歌は、「遠い将来までもと、鳥羽田の南に離宮をお作りになってから、幾代にわたって、春の花が雪と降り、行幸御幸が行われたことか。」の意味になつてゐる。「みゆき」は花の比喩としての「深雪」に「御幸」(行幸)を掛け、「ふる」は「降る」に「古る」を掛けるという工夫をこらし、華麗に詠んで、皇室の繁栄を賛美している。

定家の5首のうち、残りの1首を次に見よう。

⑬君になほ会坂山もかひぞなき杉の古葉に色しみえねば

は「相坂関」の歌である。「相坂関」によって杉が連想されやすかったことは、前に俊成女の「相坂関」の歌のところで述べた。ところで、この定家の歌における「杉の古葉」は、わが子為家の四位の緑衣を暗示したものと考えられる。そうして、この⑬の歌は、「逢坂山で人に逢うように、君が代に逢い申上げはしたものの、わが子（為家）の衣の色は杉の古葉の色だけで、他の色が見えないから、甲斐がありません。」の意味になっていて、天皇に嘆願するという特色のある歌になっている。

家隆の5首のうち、次の2首は皇室の千年万年の繁栄を寿いでいる。

⑭ながき世のためしにひかむすずか河越えていつきのわたらひの

しめ

⑮やほ万とはたのいねをかけつみて道ある里のためぞさかふる

⑭は「鈴鹿河」の歌である。この歌における「いつきのわたらひ」という語句は、万葉集卷二、一九九の長歌（柿本人麿の詠んだ、高市皇子の挽歌）「……渡会のいつきの宮ゆ神風にい吹き惑はし……」

（壬申の乱の時、高市皇子が將軍となつて戦われた有様を歌つた部分）から取っている。次に⑮の歌は「鳥羽」の歌である。「鳥羽」という歌枕が「田」を連想して「鳥羽田」となりやすかつたことは、前に定家の項で述べた。その「鳥羽田」から「稻」を連想し、「稻」の収穫の多いことを「やほよろづ」という語で表している。

「やほよろづ」という語は万葉集に用例が二つあり、「八百萬千  
万神の」（一六七）、「八百萬千年をかねて定めけむならのみや  
こは」（二〇四七）と、いずれも皇室に関して莊重な表現に用いら  
れている語である。「道ある里」という表現は、前に俊成女のこ  
ろで述べた「道ある世」という、天皇の御代を贊美する表現から連  
想される語である。そのような表現を用い、「鳥羽」という田園地  
域の繁栄を、天皇中心の繁栄に結びつけた、巧みな歌になっている。

家隆の5首のうち、残りの3首は、次のように皇室中心思想をあらわす歌になっている。

⑯辰の市やちとせをかへてくる民も國の都のわが君のため

⑰君が代にいまもつくらは津の國のながらのはしや千度わたらん

⑱しかながらしかまの市のかたびさし久しき御世につくりかさね

⑯の歌は「辰市」の歌である。「くにの都」という語は、万葉集に、

今造る久邇の都は山川の清けき見ればうべ知らすらし（卷六・

一〇三七）

など七例の用例がある。「久邇の都」は、天平十二年から十六年までの都で、今の京都府相楽郡加茂・山城・木津町にわたっていたのである。その万葉語を、家隆は「國の都」の意味に用いている。売買を連想させる「辰市」を、天皇中心思想に結びつけて詠んでいる。⑰の歌は「長柄橋」の歌である。この歌は古今集の、

難波なる長柄の橋もつくるなり今は我身を何にたとへむ（雑体

・一〇五一・伊勢）

を本歌として、巧みに詠んでいる。次に18の歌は「飾磨市」の歌である。この歌は、「飾磨市」を天皇の「久しき御世」に結びつけて詠んでいる。

兵衛内待にも皇室贊美・皇室尊重の歌が5首ある。紙幅の関係で歌だけを次に掲げておく。

①9 君が代はよしのの河のとこ波にたゆる時なき影ぞみえける

②0 月影もたえずやすまむすか河伊勢をの宮は世々の古道

②1 君が代はたゆる世もあらじ飛鳥河ながれてはやき月日なりけり（イ）

②2 山城の鳥羽田の稻はかたよりて君になびかす秋風ぞふく

②3 数しらず行きかふ民の辰の市ににぎはふ御世はこれも見えけり

## 二

次に、「内裏名所百首」における雑、「芳野河」の家隆の歌の本文について考察しよう。この歌を、「新編国歌大観」第三卷、私家集編」における壬三集の「順徳院名所百首」（蓬左文庫蔵玉吟集を底本とする）によって見ると、

よしの河よしや世の中はやき瀬にたへねばこそは今日までもあれ（イ）となつてゐる。

次に、この歌を「新編国歌大観」第四卷、定数歌編」における「建保名所百首」（曼殊院蔵本を底本とする）によって見ても、右の傍線の部分は同様に「たへねば」となつてゐる。

内裏名所百首雑歌考

ところが、同じ曼殊院本を影印に付した「内裏名所百首」（イ）（京都大学文学部国語国文学研究室）を見ると、右の歌の傍線部は「たへねは」と読めるのである。「へ」と「ゝ」とは字の形が似ている。そもそも、どちらが原本の本文の文字であったかが問題となる。

この部分の校異について、管見の範囲で記すと、右に記した外では、

〔たへねは〕新校群書類従本

〔絶ねは〕黒川文庫本

〔たたねは〕永青文庫本

〔たゝねは〕東大本、内閣文庫本、高松家本玉吟集（久保田淳氏編著、藤原家隆集とその研究）、内裏名所百首注（疎竹文庫蔵、京都大学国語国文学研究室編）

である。

ところで、この家隆の歌は、次の万葉集の歌を本歌としてゐると考えることよつてのみ、その意味を十分に汲み取ることができないのではないであろうか。「新編国歌大観」第二卷、私撰集編」によつて記す。

三七三 物部乃 八十氏川乃 急瀬 立不得恋毛 吾為鴨

ものふのやそうぢかはのはやきせにたちえぬこひもあれはす（イ）るかも（卷第十一、寄物陳思）

この歌の意味について、「日本古典文学大系」は、宇治川の早瀬で立つていようとすも流されるように、私は恋心に押し流されそうである。

と解し、「万葉集評釈（窪田空穂氏）」は、

宇治川の急流に立つてはいられないような苦しい恋を、我はして  
いることだなあ。

と解している。「はやきせにたちえぬ」は、「押し流されてしまい  
そうな、危険をはらむ苦しい状態」を意味していると考えられる。  
金葉和歌集の左の歌は、右の万葉集の歌をふまえていると考えら  
れる。

水車を見てよめる

僧正行尊

はやきせにたたねばかりぞみづぐるまわれもうき世にめぐると  
をしれ(雑上・五六一)

前掲の家隆の歌について、「内裏名所百首注」(疎竹文庫蔵)は、  
たゝねはこそはけふまでもとはたとへは立たる物は何にしても一  
度はころふと也たゝねはそのまゝなれはかくいへり又出頭の人の  
一度は亡かことく芳野川底早きにかゝはらはころふへし此も世間  
に取あはぬ義也世上の出頭をのかれてあれはこそけふまでもあれ  
と也早き瀬にたゝねばかりそ水車われも浮世をめぐるとをしれ  
と述べ、「名所百首和歌聞書」は、

人の世に出頭の人はかならず早くしぬる事有、又身をたてぬ人は  
存命る事有、さればよしや世中早瀬にたてねばこそはと也、早瀬  
にたゝねばかりぞ水ぐるま我も憂世にめぐるとをしれ  
と述べている。二つの注釈書がいずれも出頭の人を想定し、出頭の  
人のように、危険をはらむ立場に立たなかつたからこそ今日までも  
生きながらえていると解している。

ここで前掲の家隆の歌の第一句、第二句を見よう。「よしの河よ  
しや」という、頭韻に同音を置いた語を重ねた技巧は、すでに古今

集に、

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中(恋五  
・八二八・よみ人しらず)

吉野川よしや人こそつらからめはやく言ひてし言は忘れじ(恋  
五・七九四・躬恒)

と用いられている。また、吉野川の流れの速いことは、古今集に、  
吉野川岩波たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし(恋一・  
四七一・貫之)

と詠まれている。

家隆の歌は、これらの歌をふまえて、

よしの河よしや世の中はやく瀬にたたねばこそは今日までもふ  
れ、

と詠んでいる。この歌において、「よしの河」は次の「よしや」と  
同音を連ねる枕詞となり、また「はやき」の縁語となっている。

「よしや」の意味は、前掲の古今集の「流れては……よしや世の  
中」における意味と同じく、「不満足ではあるが、やむをえないと  
考えて、放任、許容するさまを表わす語」(日本国語大辞典、よし  
や①)の意と考えられる。一首の意味は、「まあいいよ。世の中に  
おいて、吉野川の早い瀬に立つように、押し流されてしまいそうな  
危険をはらむ苦しい立場に立たなかつたからこそ、私は今日までも  
命があったのだ。」と解される。

前にあげた「名所百首和歌聞書」において、「はやき瀬に立つ」  
の解説として、「人の世に出頭の人はかならず早くしぬる事有」と  
ある。このことに関して、この歌の作者家隆はどういう人を念頭に



置いていたであろうか。それを推測するに、おそらく撰政太政大臣であった良経のことではないであろうか。良経は建永元年（一二〇六）三月七日の暁、喪所において急死している。時に三十八歳であった。その突然の死は、後白河院のたたりともうわさされ、あるいは天井より刺殺されたのであって、それは政敵であった藤原頼実・兼子が謀って暗殺したのだとも推定されている。この良経の死は、「内裏名所百首」の成立した建保三年（一二一五）（十一月頃披講）の九年前のことで、同じ建保三年の九月に披講されて家隆も出詠した「内大臣家百首」の主催者道家の父の死のこともある。家隆の心に、悲痛なことから深く刻まれていたに違いない。家隆はその良経の三十八歳での若死にと対比して、自分の五十八歳の人生における述懐として、この歌を詠んだのであろうと思われる。

右のように考えると、初めに問題としたところの、「たへねば」であるか「たゝねば」であるかということについて、「たゝねば」とすることよってのみ、歌の意味を理解し、歌の情感を十分に汲みとることができると考えられるのである。

〔注〕

- (1) この百首の成立について、群書類従本その他に十月二十四日披講とあるのは予定にすぎないのであって、この年九月初旬より計画が進められ、十一月頃の披講であったとする久保田淳氏の説に従う。（「藤原家隆集とその研究」四九三、四九七ページ）
- (2) 本文は、曼殊院蔵本を底本とする新編国歌大観、第四卷「建保名所百首」による。

内裏名所百首雑歌考

- (3) 久保田淳氏「新古今歌人の研究」八二六・八八五ページ。
- (4) 校異、ふるき（永青文庫本、黒川文庫本）
- (5) 注4参照。
- (6) 山口達子氏「俊成女」、日本歌人講座4「中世の歌人Ⅱ」一七八、一七九ページ。
- (7) 久保田淳氏「新古今和歌集全評釈」第四卷、七二六の歌の語釈による。
- (8) 久保田淳氏「訳注、藤原定家全歌集、上」二〇〇ページ頭注。
- (9) 注8の書、二〇二ページ。
- (10) 注9に同じ。
- (11) 校異、第三句の「かけつみて」は、群書類従本、東大本傍書、内閣文庫二〇一・三一二本では「かりつみて」。第五句の「さかふる」は、群書類従本、高松宮家本玉吟集では「さかゆる」。
- (12) 校異、第五句の「つくりかさねん」は、東大本、黒川文庫本、高松宮家本玉吟集、内閣文庫三二二本では「つくりかさねよ」。
- (13) 校異、第五句の「月日なりけり」は、東大本、黒川文庫本、永青文庫本、内閣文庫三二二本では「月日なりとも」。なお、この歌は東大本および黒川文庫本では十一番目に書かれ、俊成女の歌ということになっている。
- (14) 稿者は蓬左文庫蔵玉吟集の現物は未見である。
- (15) 臨川書店、昭和五十八年刊。

(16) 立教大学日本文学第三十一・三十二号、井上宗雄氏・天沼律子氏・茂木みどり氏「名所百首和歌聞書」〔解説と翻刻〕による。

(17) 安田章生氏「新古今集歌人論」。なお安田氏は次のように述べておられる。「これらのことについては、三長記、愚管抄、尊卑分脈、続本朝通鑑等参照。なお、良経の妻となった藤原能保の女は源頼朝の姪にあたり、彼は政見の上からも親幕派であった。そのことが後白河院の霊の怒りを買ったというように考えられ、そのたたりというような噂が出たものであろう。また、頼実・兼子夫妻は兼実・良経の政敵であった。」